

第 7 号

本小の教育「授業研修会」

2 年全組

◦インクルシブ教育「特設◦脳の引き出し」

今回の特設授業『脳の引き出し・2 学年』は、るみ子先生が実施することになっている。それは、ステップ 1 組の子共達の協力学級と云うことで 2 年生全体に実施していただくことになった。2 の 1 は予定通り実施、2 の 3 は、ステップの子共が休みで、2 の 2 は担任の都合で延期となってしまった。それで校長として参観できなかった学級には、申し訳なく思っております。しかし、参観された先生方から写真と感想などを貰った。るみ子先生の親心溢れる授業に対して敬意を表すると共に、感謝を申し上げます。有難うございました。

■ 2 学年「照屋 るみ子（大城有子、新里陽子、岸本奈津）」



【児童の手(学習規律)】

■「苦手の箱」ワークシートより

2 の 1	01	話す人を見るのが苦手	09
	02	丁寧に字を書くのが	14
	03	教科書を読むことが	12
	04	静かに話を聞くこと	11
	05	みんなの前で話す	11
	06	計算が苦手	09
	07	運動が苦手	04

(男 11 名、女 19 名、計 30 名)

【教室の色(支持的風土)】



【教師の眼(教師の姿勢)】



■「苦手の箱」ワークシートより

2 の 2	01	話す人を見るのが苦手	06
	02	丁寧に字を書くのが	14
	03	教科書を読むことが	14
	04	静かに話を聞くこと	11
	05	みんなの前で話す	16
	06	計算が苦手	14
	07	運動が苦手	00

(男 12 名、女 17 名、計 29 名)



■「苦手の箱」ワークシートより

2 の 3	01	話す人を見るのが苦手	03
	02	丁寧に字を書くのが	06
	03	教科書を読むことが	06
	04	静かに話を聞くこと	03
	05	みんなの前で話す	08
	06	計算が苦手	04
	07	運動が苦手	04

(男 12 名、女 17 名、計 29 名)



■■「子共の実態として感じる事」■■

- 男 35 名、女 53 名、女の子が 20 名くらい多い落ち着いた学年である。
- ①みんなの前で話す事が苦手な子が多い
- ②丁寧に字を書く事が、苦手な子が多い
- ③教科書等を読む事が、苦手な子が多い
- ④計算をする事が、苦手である子が多い
- ⑤静かに話を聴く事が苦手な子が多い
- 支持的風土づくりの出来た集団である

■■「学年の取組として感じる事」■■

- 授業終始のけじめ、あいさつが良い。
- 学習用具の準備等、指導徹底してる。
- 各担任の発問、声かけ。意識してる。
- 子共の自己肯定感を高める師の言動。
- 児童個々のつぶやきを大切にしている
- 所属感、安心感、発言出来る雰囲気。
- 子共へかける、魔法の言葉(武器有り)
- 基本は、明るく元気よく、ハキハキ。

■■「授業者の思いとして感じる」■■

- 低学年の子共達へ「伝える」工夫が大
- 純粹に、真っ直ぐに、注視している。
- だからこそ、だまし絵に、気づき難い。
- 脳の引き出しを、リュックにアレンジ
- より生活に、身近なものへとアレンジ
- 引き出し＝苦手の箱へ、そしてリュックへ
- 箱の中に、又、箱が入ってる(子の声)
- 学級担任は、皆の応援団長と「つなが」

【感想】 「脳の引き出し」、特別支援に関する大切な「特設授業」でした。本当に有難うございました。♥

- 「先ずは、2 学年全クラス参観出来なかった事にお詫びします。」互見授業は「全部参観」しましたよ。
- 「通信 7 号」が遅れたのも、参観出来なかった事による情報収集に多少の時間を要す。(言い訳ばかり)
- 「低学年の子共達への授業」背負ってるリュックの中の「苦手の箱」にアレンジし、より具体化した。
- 「脳の中の引き出しは見えない」が「リュックの中の[苦手の箱]に見える化」した。子共には納得感！
- 「授業後にも、子共達は[苦手の箱]を、意識し、認めて、気遣ってあげられたと、担任の声もあった」
- 「ふわふわ言葉」を使うと「セロトニン」が分泌され、「苦手の箱」がどんどん小さくなっていきます。



校長より

